

山裾寺院敷地の地形論的占地特性に関する研究

京都大学大学院工学研究科
京都大学大学院工学研究科
京都大学大学院工学研究科

学生会員 ○山口 一人
正会員 山田圭二郎
フェロー 中村 良夫

1.はじめに

古来、神聖な対象と考えられてきた山と人々が生活している里との境界である山裾に建立されてきた寺院は、周囲の地形環境と見事に調和した景観を創り出している。しかし、土工機械を使った大規模な造成が行われるようになった今日、山裾に進出した住宅地・高速道路は周囲の地形環境・景観を無視したものが多くみられる。

そこで本研究では、京都盆地の山裾に存在する寺院がいかなる地形に占地されているかに注目し、周辺の微地形をどのように寺院敷地に取り込んでいるかを明らかにし、山裾寺院が共通してもつ景観的な特徴を見出すことを目的とする。1/2,500の都市計画地図から得られた等高線データより地形解析モデルツールを用いて三次元画像を作製し、必要な部分においては断面図を作製して、特に占地と関わり合いが深いと考えられる山裾寺院の参道形成と領域形成に焦点をあて分析を進めた。

2.山裾寺院敷地の占地

京都盆地の山裾にあると思われる寺院を28選定し、1/25,000の土地条件図「京都」をもとにこれらの寺院が地形学的にいかなる所に占地されているかを図.1のような地形分類図を作製し、分類したのが図.2である。これより、山裾寺院の敷地のおおかたが段丘と急傾斜扇状地に占地されていることが分かった。寺院敷地を含む段丘及び扇状地を上・中・下に分割し、各区間の中央の標高をy軸に、勾配をx軸にしてグラフにしたのが図.3である。グラフの中で、寺院敷地のある区間のプロットを黒く塗りつぶした。図.3より、段丘占地型寺院は、中央部のような勾配が小さな所に敷地が造成されていることが多いのに対し、扇状地占地型寺院は、扇頂部のような勾配が大きな所に敷地が造成されていることが多いことが分かった。そのため、段丘占地型寺院が原地形にあまり

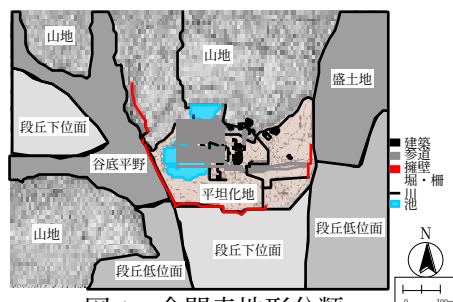
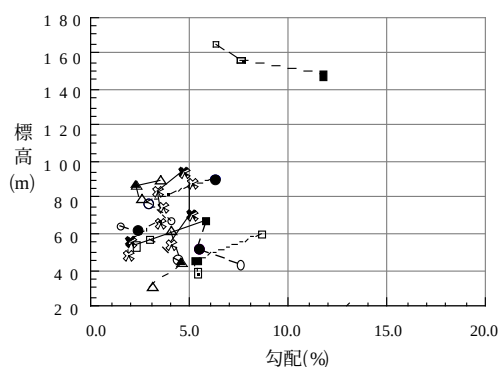


図.1 金閣寺地形分類

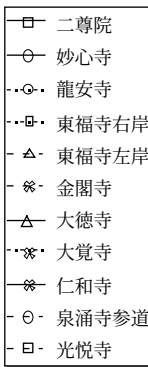
段丘	上部	二尊院（参道）・金閣寺・龍安寺	
	中央部	大覚寺・妙心寺・仁和寺・大徳寺・東福寺・知恩院	
	先端部	光悦寺	
扇状地	急傾斜	銀閣寺・実相院・曼殊院・詩仙堂・南禅寺・青蓮院 泉涌寺（参道）・法然院・高台寺・智積院	
		永観堂	
	緩傾斜	西芳寺・天龍寺	
崖錐	常寂光寺・二尊院（寺院建築）		
山地斜面	急斜面	華嚴寺	
	緩斜面	谷	正伝寺・泉涌寺（寺院建築）
		尾根	清水寺・光明寺

図.2 山裾寺院の地形分類

大きな所に敷地が造成されていることが多いことが分かった。そのため、段丘占地型寺院が原地形にあまり



《段丘》



《扇状地》

図.3 傾斜-標高グラフ

キーワード：山裾寺院敷地、占地、参道形成、領域形成

連絡先：〒606-8501 京都市左京区吉田本町 TEL 075-753-4788 FAX 075-753-4789

手を加えること無く敷地が造成されているのに対し、扇状地占地型寺院は擁壁などの高低差を埋める処理が施されている場合が多くみられた。

3.山裾型寺院敷地の参道形成にみられる特色

本研究では、参道を山門に至るまで（導入部）と山門から寺院中心建築に至るまで（アプローチ）と中心建築から裏山に延びる道（山際）の3つに分割して分析を進めた。導入部では、段丘傾斜や扇状地傾斜や図.4の清水寺にみられるような尾根といった原地形と曲折を利用することで奥を見えにくくしている寺院と参道形状が直線のものは山門と山門前の階段を利用して奥深い敷地へ入ることを印象づけている寺院が多いことが分かった。また、アプローチでは導入部同様、原地形を利用して奥を見えにくくしている寺院の他に、図.5の銀閣寺にみられるような平面形状に工夫をすることで、奥を見えにくくしている寺院もみられた。これらから導入部・アプローチに共通していえることは、いずれも参道から奥の寺院敷地を見えにくくすることで奥への期待感を演出していることである。また、山際まで参道を通して奥山を実体験することで、より奥深さを印象づけている寺院もみられた。つまり、参道は登り進むにつれて奥深くへ入って行く印象を与える演出がなされているといえる。

4.山裾寺院敷地の領域形成にみられる特色

山裾寺院は、周辺の自然地形を利用して寺院敷地からの景観を魅力的に創り出す領域を形成している。図.6は各寺院でみられた敷地領域形成の演出を7つに分類したものである。この中で、囲繞型-谷間・崖型・川型は境界を明確に示すことで領域を形成しているのに対し、囲繞型-尾根・端山型・借景型・奥の院型は寺院敷地に直接接していない周辺地形を視覚的に寺院内に取り込むことにより、境界の曖昧な無限定的領域を形成していることが分かった。

5.おわりに

本研究で明らかになったことを以下に示す。

(1)山裾寺院敷地のおおかたが段丘と急傾斜扇状地扇頂部に占地されている。

(2)山裾寺院の参道を導入部・アプローチ・山際の3つに分割し、それぞれの区間のもつ特徴を分析をした。その結果、山裾寺院の参道は、登り進むにつれて奥深くへ入って行く印象を与える演出が施されている。

(3)山裾寺院の周辺地形から創り出される領域を図.6の7つに分類することができた。そして、その周辺の自然地形との境界を明確にしたり、曖昧にしたりすることで山裾寺院が景観的領域を創り出している。

これらから得られる結論は、山裾寺院敷地が人々が住む「里」と「山」とを結びつけることで、「里」と「山」とともに感じられる両義的な空間を創り出しているということである。

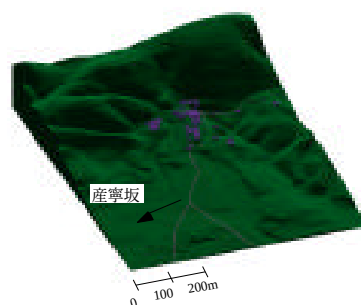


図.4 清水寺参道(導入部)

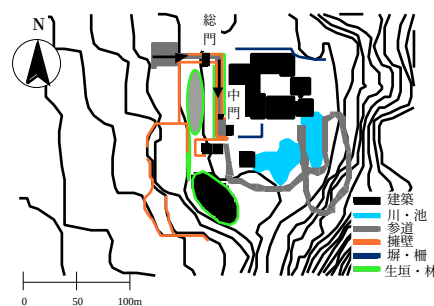


図.5 銀閣寺参道(アプローチ)

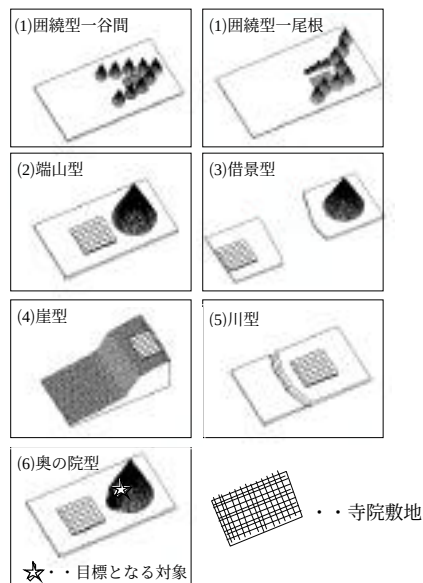


図.6 敷地領域演出のモデル

【参考文献】

- ・ 齊藤 潮：神社参道の空間構成に関する研究，都市計画学会学術研究論文集， 1989， pp.457-462
- ・ 樋口 忠彦：景観の構造，技報堂， 1975